

感染症専門医を育成する仕組みづくり

対談者：齊藤 博 長野県立須坂病院 院長

内藤 威 同 副院長

聞き手：鈴木 信夫 なのはな同窓会広報担当常任理事

鈴木：長野県衛生部医療政策課の医師確保対策室、及び信州なのはな会の方々と相談し、長野県在住の先生方とのインタビューを行っています。今回は、長野県立須坂病院長の齋藤博先生、副院長の内藤威先生の経歴も含め、ご紹介頂きたいと思います。このインタビューの目的は、長野県の医療が良くなるための参考情報、及び長野県医療状況の紹介をきっかけに、医師の研修制度等も含め、各県の医療改革のために役立つ情報源となればと思っています。先ず、齋藤博先生から、ご自身の経歴、先生の立場から須坂病院をアピールして頂ければと思います。

齋藤：私は昭和 51 年、長崎大学を卒業し、そのまま、郷里の信州大学に帰りました。選んだのは当時の第二内科、消化器、血液を扱っている科に入りました。その後、大学では血液を専門に仕事をしてきました。平成 16 年に当院に来ましたが、その前は、長野赤十字病院の血液部長として十数年勤務して、造血幹細胞移植センターなどを立ち上げた後にここへ来ました。血液に携わっていた関係で、感染症もやっておりました。前院長が感染症の拠点病院や長野県立病院として医師を養成する病院として充実させたいとの意向から誘いを受け、ここに来た次第です。病院の沿革ですが、昭和 23 年に日本医療団から長野県に移管され、県立病院となってから 61 年目を迎えたところです。平成 14 年に現在の新しい病院に建て替えられ、設備も充実しました。県立病院としての大きな役割のひとつは研修医を含めた若手医師を育てる研修病院としての役割です。歴代院長先生のご尽力もあり、現在は 21 の診療科を持つ総合病院になりましたので臨床研修病院として大変良い環境が出来ています。もうひとつは感染症を中心とした病院づくりです。結核病床が 24 床あります。平成 19 年 1 月には第 1 種、第 2 種の感染症病床 8 床が完成しました。また、長野県のエイズ治療の中核拠点病院にもなっており、感染症に関してはかなりの力を持った病院です。現在、新型インフルが問題となっていますが、いつでも対応できるような体制づくりをしています。感染症病棟のハードの面の充実が実際にどのくらい医療に役に立つものか、私自身疑問でしたが、現実にかような社会状況に直面しますと、いかに心強いものかと感じています。長野県には感染症を専門にする病院がありませんし、全国的にも数少ない施設です。感染症を勉強したいという先生が居られれば、当院へ来て一緒に仕事をして頂けると有難いですね。千葉大学は感染症のメッカです。教えて頂く点が多々あります。感染症医療を更に充実すべく県とも相談して、感染症専門医師を養成出来るような仕組みづくりを考えて行きたいと思っています。



鈴木：先程、熊谷先生の「須坂やすらぎの園」を見学いたしました。総合的に高齢者を診るといふ熊谷先生に続く医師を育てるといふことも、当院の大きな役割ではないかと感じました。そうした観点から何かありましたら。

斎藤：この地域の高齢者施設から具合が悪いと搬送されてくるケースが多いです。そうした場合、色々な病気を抱えて来られますので、総合的に患者さんを診なくてはなりません。ここは、自治医科大学を卒業した医師の初期研修病院を担っていますから、プライマリー医療を幅広く学んで、県内の各地域で活躍しています。当院の後期研修の中には家庭医学コースがあり、希望により選択できます。外来では、総合医療を実践するために総合診療部を設けて対応しています。総合診療を担当するのは内科医師が主体ですが、副院長（血管外科）や泌尿器科、呼吸器外科の外科系医師も協力した総合診療を行なっています。

鈴木：千葉大学には真菌センターがあり、医学部附属病院の場合、総合診療部もあります。東洋医学にも特徴があります。個人的には、様々な分野で長野県立須坂病院と連携ができるとうれしいと思います。院長先生、有難う御座いました。

鈴木：次に、副院長先生、婦人科部長の立場も含めて、自己紹介をお願いします。

内藤：内藤威です。昭和48年に千葉大学を卒業してから産婦人科を専攻しています。成田赤十字病院に10年ほど勤め、昭和59年に当院へ来てから26年目になります。去年から産科は私一人になり、1年間は産科を休止していましたが、長野県や須坂市が医師招聘ということで頑張ってくれたお蔭で、今年から私を含め4人でやっています。今、産婦人科の数が非常に少なく、一時閉鎖するともうお医者さんは来ないだろうと、殆どの住民が思ったのですが、奇跡的に当院だけは1人から4人になったので、皆さんに不思議がられ、どうやったのかと聞かれます。この病院の診療圏は



7万人から8万人いますが、産婦人科病院は一軒もなく、須坂市民や市の職員、それに加えて長野県も産婦人科を絶対復活させようとする熱い心が、お医者さんに伝わったのではないかと思います。具体的には、40代、30代のお医者さんと、自治医科大で産婦人科医になりたいという女性と私を含めて4人になりました。医者の招聘は医者だけで探そうとすると範囲が狭まります。色々な職種や知合いなどの「つて」を探り、大きな網を掛けるとかかる可能性が大きいと感じました。若い医師が二人来ましたが、彼等は東京に住んでいたのですが、都会の生活に飽きたり、田舎が好きという方は来てくれると思います。須坂病院は、人口5万人の都市でこじんまりしていますが、空気も良く山はきれい、スキーは楽しめる、ゴルフも出来ます。そうしたことに興味のある人は永く勤められるのではないかと思います。私も来た時は39歳で、今は60歳を越えました。こんなに永く居るとは思いませんでした。住んでみると、都会にはない良さがあり、患者さんも素朴で、クレームなども少ないです。医者も37人で、横の連携も上手く行っています。一度、本院へ来られて、見て頂ければと思います。今日は遠い所までインタビューに来て下さり、有難う御座いました。それでは、これから院内を回って、感染症病棟や若手の医師を紹介したいと思います。

鈴木：総合医療や医師確保の方策などのご提言を頂き、有難う御座いました。



蔵の街から